「愚かなパンタカ」伝承考（二）

関　　稔

先回の「現在世物語」に引き続き，パンタカの「過去世物語」を紹介する。*Divyāvadana* におけるかれの過去世物語としては四つ知られるが，今回はその前半の三種である。左側が *Div.* からの和訳，右側が対応する『根本説一切有部毘奈耶』の叙述である。梵語からの和訳にあたっては，底本の読み，難解語・表現の解釈，訳語の選択などについての註記が欠かせないが，都合で次回にゆだねる。〔 〕で若干の補足をした以外は単純な逐語訳である。また，漢訳については，新字体のある漢字はそれを使用し，訓点は補わずに引用した。これも正確な現代語訳がなされるべきであろう。ただ，適切な方法ではないかもしれないが，句点・コンマ・かぎなどを使用して，幾分文意はとりやすいようにした。

Divyāvadāna (ed. P. L. Vaidya)

（過去世物語，その一）

〔434[17]—435[28]〕修行僧たちよ，むかし，とある村落にバラモンが住んでいた。かれは同じ〔バラモンの〕家系から妻を娶った。かれは，かの女と遊び，戯れ，ねんごろになった。かれは更に遊び，戯れ，ねんごろになったが，遊び，戯れ，ねんごろになっているうちに，

『根本説一切有部毘奈耶』
（『大正蔵』23巻）

巻31〔798中[27]—799中[2]〕

過去世時，於一聚落，有婆羅門。娶妻未久，便生一息。於後復誕一男，如是乃至生十二子。年俱長大，各並娶妻，

十二人の息子が生まれるまでになった。かれは，かれらに身を固めさせた。

広為居宅。

のちに，かれの妻が亡くなった。そのバラモンも老境に入った。盲目となり，〔息子の〕嫁たちは素行が悪かった。かの女たちの主人が外出したとき，かの女たちは他の男たちとねんごろになった。そのバラモンは声〔を聞き分けるの〕に熟達していた。かれは，『これは，わたしの息子の声だ。これは，他の男のだ』というように識別した。かれは〔他の〕男たちの足音を聞くと，その嫁たちを怒鳴りつけるのだった。かの女たちは考えた。『このバラモンは，わたしたちの不利益になるように振舞う』〔それから,〕かの女たちは，かれに，〔粗末な〕くず米の飯と酸っぱい粥を供するようになった。

其母不久染患命終。父既年衰，両目青盲，一無所覩。時彼新婦，兒不在時，便与外人，行邪悪事。婆羅門善知声相，聞行声時，知是己子，知是他人。聞彼行声，知非己子，即呵叱彼新婦曰「汝莫如是造邪悪行」時彼新婦，知其瞋已，共相告語「此婆羅門，当与我等作無利事。我今宜可絶其美食」便与麁飯，投以醋漿。時婆羅門年既衰耄，不堪噉食。時婆羅門告諸子曰「汝諸新婦，与我麁食，投以醋漿，豈能済命」時彼諸子告其婦曰「汝等，何因，与父麁飯，和以醋漿」婦告夫曰「大翁福尽，我等何過。毎煮飯時，於其釜中，投以白米，変成赤飯。和以美酪，変

そのバラモンは息子たちに語った。

「わしに，この嫁どもは，くず米の飯と酸っぱい粥を出すのだぞ」

そ〔の息子〕たちは，かの女たちに言った。

「お前たちは，どうして，お父さんに，くず米の飯と酸っぱい粥を出すのだ」

かの女たちは言った。

「かれの福徳が尽きてしまったのだわ。このために米粒をお鉢に入れておくと，くず米の飯になるし，凝乳を入れておくと酢になってしまうのよ」

その息子たちは言った。

「どうして，こんなことがありうるのだろうか」

かの女たちは言った。

「わたしたちが，あなたがたのために〔実際に〕調べてみましょう」

かの女たちは言った。

「わたしたちは，約束したことを，いま，実行しなければいけません」

作醋漿」其夫報曰「何有斯理」妻便答曰「仁若不信，当可親観」諸婦議曰「我已告夫，須求免過」

かの女たちは陶工に言った。

「お前さん，お前さんは，口が一つ〔で，腹が二つ〕の土釜を，二つ，こしらえることができますか」

かれは言った。

「できますとも」

かれは，口が一つ〔で，腹が二つ〕の土釜を，二つ，こしらえた。

かの女たちは，一方の土釜〔の片方の腹〕にくず米を，第二〔の土釜の，片方の腹〕に酢を入れた。かの女たちは，主人たちの目の前で，一方の〔435〕土釜〔の，べつの腹〕に米粒を，〔第二の〕一方〔の土釜の，べつの腹〕に凝乳を入れた。かの女たちは，上首尾にやった。

遂至陶師処，告曰「賢首，汝頗能作，両枚瓦釜，口一腹二，各容数升」陶師曰「与我倍価，我当為作」報言「善」陶師作已。婦即酬直持帰，為翁作食。在私屏処，於二釜中，一隔内投赤米，一隔内置醋漿。既対夫前，即便一隔内投白米，一隔内置美酪。二釜倶熟。

〔かの女たちは〕言った。

「まず，だんなさまのお父さまに，最初に食べていただきましょうか。それとも，あなたさまが〔まず，お食べになりますか〕」

そ〔の息子〕たちは言った。

遂告夫曰「為先与翁食，君先食耶」夫曰「先奉我父」

「まず，父上に食べていただく」

かの女たちは，かれらの目の前で，そ〔の父親〕に，一方の土釜からくず米の飯を，第二〔の土釜〕から酢を取り出して与えた。それから，同様に，かの女たちは，そ〔の息子〕たちに，一方の土釜から白米の飯を取り出し，第二〔の土釜〕から凝乳を取り出して与えた。

そ〔の息子〕たちは，そ〔の父親〕に言った。

「お父さん，あなたの福徳が尽きてしまったのです。ですから，一方の土釜に米粒を，第二〔の土釜〕に凝乳を入れたのに，それが，〔粗末な〕くず米の飯と酸っぱい粥になってしまうのです」

其妻即於一釜中，斟与赤飯。次於一釜，酌与醋漿。次至夫辺，授以白糜，并安美酪。兒既見已，白其父曰「慈父，福徳実爾消亡。同一釜中，看著白米及安美酪，及其熟已，変為赤飯醋漿」

〔父親の〕バラモンは考えた。『わしは，幾百の奉納もして，財産を獲得した。どうして，わしの福徳が尽きたのだろうか』かれは，かの女たちが不在のときに，台所に入って手探りで調べていて，口が一つ〔で，腹が二つ〕の土釜を，二つ，入手した。かれは隠した。かれは，その息子たちがやって来ると，それを示した。

「ごらん，わしの福徳は尽きてしまったようだ。行って，見なさい。〔というのも，〕わしらの家にだけ，口が一つ〔で，腹が二つ〕の土釜があるからだ。息子たちよ，他の家々には，不運なわしらの，口が一つで〔腹が〕二つの土釜なんか，ありはしない」

其父聞已，窃作是念『我従少小，不行欺誑。興立生計，皆如法求財。何故，今時福業消尽。蓋応是此悪行婦人，自為詐偽，見欺於我」老翁便伺人不在時，独入厨中，摸諸釜器。便闇捉両釜，俱腹中有隔。遂即持釜，蔵之屏処。諸子既至，持釜告曰「汝等当知，非我福尽，釜令福尽」説伽他曰「諸子汝当知　他釜一口腹

かれらは，その妻女たちを存分に打ち据えた。かの女たちは考えた。『このバラモンは，わたしたちの不利益になるように振舞う。殺してしまおう』そこへ，蛇捕がやって来た。

かの女たちは尋ねた。

「蛇はありますか」

かれは言った。

「どんな蛇を求めているのかね。生きているるやつかね，それとも，死んだやつかね」

かの女たちは言った。

「死んだやつよ」

かれは考えた。『この者たちは死んだ蛇で何をするつもりなのか。きっと，この者たちは，あの老人を殺したいのに違いない』ところで，当然のことだが，蛇は憤激すると，二か所に毒が集まる。頭と尾とに，である。そこで，かれは，〔蛇を〕怒らせておいてから，頭と尾を手ずから切断し，かの女たちには蛇の真中のところを渡した。かの女たちは〔その蛇で〕吸いものを用意し，そのバラモンに言った。

「お父さま，肉入りの吸いものを，お飲みになりますか」

そのバラモンは考えた。『どうして，この者たちは，わしに，肉入りの吸いものを与えようとするのか。きっと，何か有毒なものが与えられるに違いない』かれは〔また〕考え

吾今福業尽　一釜両腹生」時彼諸子，見斯事已，各忿其妻，厳加楚撻，告云「若更如是者，当与重杖駆汝出舎」是時，諸婦聞是語已，遂相告曰「此老婆羅門，共兒計校，欲害於我。我等宜応作余方便断其命根」時有弄蛇人，来入其宅。諸婦問曰「有毒蛇売不」答曰「須何等蛇。為死為活」報言「死者」彼作是念『何意，諸婦従索死蛇。豈非有意当欲殺此老婆羅門耶』問曰「欲酬幾価」答曰「随汝所索」然諸毒蛇，被逼悩時，毒在両処。謂頭及尾。蛇師乃出一黒蛇，以杖打瞋，截去頭尾，取其中腹，持付婦人。時彼得已，将用作羹。羹既熟已。持至翁所，白言「大翁，有好肉羹，能得食不」時婆羅門作是念『何処

た。『飲んでやろう。いずれにしても〔いつかは〕死ぬのだ』かの女たちは，かれに，肉入りの吸いものを与えた。かれは飲んだ。かれの〔眼球に張った〕膜が，湯気で破れた。かれは〔再び，眼が〕見え始めた。かれは〔故意に〕倒れたまま，言った。

「わしは死ぬ，わしは死ぬ」

かの女たちは言った。

「急いで飲んではいけません」

かの女たちは言った。

「お父さん，もっと，お飲みになりますか」

かれは言った。

「飲む」

得肉，与我作羹。豈非方便欲殺於我』復作是念『我今老疾，無済念者，何用活為。従是従非，我当噉食』報新婦曰「必有肉羹，将来我食」授与食訖，由羹気故，眼膜便開，漸能見物。然而詐云「我死，我死」諸婦聞已，願速命終，白言「尚有余羹，能尽食不」報云「能食」

かの女たちは，かれに，さらに肉入りの吸いものを与えた。かれは，さらに飲んだ。かれの〔眼球の〕膜が，その湯気で，一層破れた。かれはもっとはっきりと見え始めた。かの女たちは，以前はかれが盲目であったので，恐れげもなく振舞ったのだが，〔今も〕同様に振舞いだした。かれは，杖を持ち，立ち上がって，言った。

「お前たちは，わしが今でも見えない，とでも思っているのか。わしは，今は，見えるのだぞ」

かの女たちは，恥じ入って，遁走した。

其婦総皆授与。重更食之。眼転明浄，顧眄左右，悉皆明察，私心喜慶，佯眠不起。彼諸新婦如患眼時，対婆羅門，造諸非法。婆羅門把杖急起，告云「我今見汝，勿復更然」是時，諸婦黙赧無対。

「修行僧たちよ，いかに考えるか。そのバラ

「汝等苾芻，勿生異念。

モンこそ，その時その折の，このパンタカなのである。かれの十二人の〔息子の〕嫁たちこそ，十二人組〔の女性修行僧たち〕なのである。そのときも，この女性たちは，かれに『不利益になることをしよう』として，かえって利益になることをしてしまったのだが，今もまた，この女性たちは，かれに『不利益になることをしよう』として，かえって利益になることをしたのである」

昔時婆羅門者，即愚路是。十二婦者，即十二衆苾芻尼是。往時欲害其命，反成大利。今時欲令恥辱，更彰聖徳」

（過去世物語，その二）

〔435[29]—439[10]〕修行僧たちはブッダ・世尊に尋ねた。

「さて，尊師よ，〔いかなる経緯があって〕世尊は尊者パンタカを，わずかな忠告で励まし，輪廻の荒野を越え〔させ〕，究極の完成である無上の安らぎ・涅槃に安住させられたのですか」

世尊は言われた。

「今だけのことでなく，修行僧たちよ，同じく過去においても，わたくしはこの者を，わずかな忠告で励まし，大いなる富貴のなかに安住させたことがあるのだ。そのことを，聞きなさい」

巻32〔799下[23]—801中[12]〕

爾時諸苾芻，見如上事，咸復生疑，重白仏言「世尊，何意，愚路苾芻，因少教誡，自発正勤，於生死中，速能出離，證得究竟安隠涅槃」

世尊告曰「汝等当知，愚路苾芻，非但今日因少教誡而能證悟。於過去時，亦因少教，自発正勤，得大富貴，安楽而住。汝等応聴」

〔436〕修行僧たちよ，むかし，とある村落に裕福な長者が住んでおり，大金持ちで，大

乃往古昔，於某聚落，有一長者，大富多財，

いに享楽していた。かれは，同じ家系から妻を娶った。かれは，かの女と遊び，戯れ，ねんごろになった。かれに息子が生まれた。かれは妻に向かって言った。

「なあ，お前，わたしたちに〈借金づくり〉が生まれた。わたしは，商品を持って，大海に出ることにする」

かの女は言った。

「そうなさいな」

その長者は考えた。『わたしがこの女にたくさんの金銭を渡せば，べつの男たちと暮らすようになるだろう』かれは，かの女に金銭を渡さなかった。〔ところで，〕その村に資産家が住んでおり，その長者の友人であった。『わたしの妻に衣食の援助をするようなときには』と，かれの手に，たくさんの金銭を託した。かれは商品を持って大海に出た。そこで，不運にも災難に遭ってしまった。かの女はその子供を，親類の力をかりながら自らの手で養い，守り，大きくした。そ〔の子供〕は母親に尋ねた。

「お母さん，ぼくたちのお父さんやお祖父さんたちは，どんな仕事をしていたのですか」

かの女は考えた。『もしこ〔の息子〕に〈大海で船を使った交易をしていた〉と話せば，こ〔の息子〕もまた大海に出て，そこで不運にも災難に遭うということになるかもしれな

受用豊足。娶妻未久，便生一子。容貌端正，広説如前。告其婦曰「賢首，吾今有子，費用処多。欲往海中求覓珍宝」妻言「随意」長者便念『我若多留財物与婦人者，此必驕奢，恐造非法』遂便少与。於此聚落，有一商主，是其知識。持余財貨，皆悉寄之，告云「今欲経求還期未卜。我婦若於衣食有乏，当可給済」即持財貨，入于大海。遭風破舶，往而不帰。被寄之人，不為存念。時長者婦，仮親族力，及自営為，養育其子。年漸長大，問其母曰「我之父祖，作何生業，得存家道」母作是念『我若報云〈入海興易〉或恐此子亦往海中。遭難不還，我受孤苦』遂即報云「汝之祖父，於此興易，以為活命」子白

い』

「お前のお父さんやお祖父さんたちは，ここで商売をしていた，と聞いています」

かれは言った。

「ぼくにお金を出してください。それでもって，ここで商売をすることにしましょう」

母親は言った。

「どうして，わたしにお金があるというの。お前は，やっとのことでわたしが親戚の力をかりながら，自分の手で養い，育て，大きくしました。どうして，わたしに，お金が自由になるかしら。でも，お前のお父さんの友人で，こういう資産家がいます。この人のところから，お金を貰って，仕事をするようにしなさい」

母曰「可与銭財，我学興易」母告之曰「我於何処，得有銭財。但仮宗親貧力養汝。更無余物遂汝所求。然某甲商主，是汝之父故旧知識。可従覓物，随意経営」

かれは，その家に行った。〔たまたま，〕そ〔の資産家〕の従僕の一人が二度までも損害を出した。そ〔の資産家〕は，そ〔の従僕〕をなじった。

〔そのとき，〕その家から，下女が，がらくたの上に死んだ鼠がいるのを見つけて，捨てようと持って来た。その資産家は従僕に言った。

「〔まともな〕男ならば，この死んだ鼠で，身をたてることができる」

その子供は〔そのことを〕聞いた。かれは考えた。『この人は高潔な人だ。この人が，あ

其子聞已，詣商主処。時商主家，有人取銭，三返失利，彼正瞋責，求入無因。其家婢使，持糞掃出，中有死鼠，倶欲棄之。長者懐恨，告取銭人「汝今知不，世間有人，解求利者，能因此婢所棄之鼠産業豊盈」彼長者子，遥聞是説，便作斯念『此大商主，終不虚言。豈不由

れやこれやと〔いい加減なことを〕言う筈がない。きっと，この死んだ鼠で，身をたてることができるに違いない』かれは，かの女の後について行った。その下女は〔死んだ鼠を〕ごみために捨てた。

此死鼠能得富楽』即随婢使，観其住止。婢以糞鼠，棄于坑内。

かれは，その死んだ鼠を持って市場へ行った。そこで，商人が猫と遊んでいた。かれは，その猫に死んだ鼠を見せた。そいつは，それを見て，跳ねだした。その商人は子供に言った。

「この猫に死んだ鼠をやっておくれ」

そ〔の子供〕は言った。

「どうして，これを，ただで上げなければいけないの。代金を下さい」

そ〔の商人〕は，そ〔の子供〕に，掌一杯の豆を与えた。かれは考えた。『これを食べれば，元手が無くなってしまうだろう』かれは，それを揚げ鍋で炒り，瓶に冷たい水を満たし，それを持って，その場を離れ，柴刈たちが休息する場所へ出向いて，待っていた。柴刈たちがやって来た。かれは言った。

「おじさんたち，柴の荷を下ろしたらいかがです。暫く休むといいですよ」

かれらは柴の荷を置いた。かれは，かれらに，豆を少しと飲み水を与えた。かれらは言った。

「若者よ，どこへ行くのかね」

童子取鼠詣大市中，見有飢猫繫頸於柱，以鼠示之。彼猫見鼠，遂便跳躑。是時猫主，告童子曰「可与死鼠」童子報曰「豈以空言便覓他物。若酬価直，我当与鼠」猫主便以一捧豌豆，用酬其直。是時童子留鼠取豆，便於瓦上熬之令熟，即作是念『我若尽食，本物全無』遂以衣裾裹豆，瓶持冷水，出向村外，於売樵人停息之処，待彼帰還。時売樵者，日晩俱至。童子見来報言「大兄，時既炎暑，可且停息」時売樵人，即便暫止。童子遂将熟豆，行与諸人，授以冷水。諸人問曰「小

「柴をとりにです」

「若者よ，わしらは，朝早くに起きて行ったのに，いま戻って来たのだ。お前さんが，いま出かけるとすると，どれくらいで戻ることになるかな」

かれらは各自，かれに，柴を差し出した。かれに柴という元手ができた。かれは，それを持って引き返した。かれは，それを売って，〔437〕豆を入手し，炒り，水瓶を満たして，同じその場所へ出かけ，待っていた。その柴刈たちは，同様に，かれに豆をわけて貰い，冷たい水で元気になった。かれらは，かれに言った。

「若者よ，毎日，お前さんは，豆と水を持って来て，ここで待っていなさい。わしらは，お前さんに，元手になる柴を運んで来てあげよう」

かれは，毎日，同じようにやりだした。かれは，かれらに言った。

「おじさんたち，柴の荷を，あなたがたが市場へ持って行くまでのことはありません。ぼくの家に置いてください。あなたがたには，こういうふうにして，まとめて代金を渡すようにします」

かれらは，かれの家に柴の荷を置いておいた。そのあと，七日の間，雨天が続いた。かれは，その柴の荷を売った。かれに，多くの

弟，汝欲何去」答曰「我欲取樵」報言「我旦出城，今始来至。汝今若去，斉暮不還。徒事艱辛，必無所獲」

時彼諸人，各減一樵，持以相恵。童子得樵，合為一担，詣市売之。所得貝歯，並買豌豆。悉皆熬熟，瓶持冷水，還之旧処，以待樵人。諸人既来，同前分布。樵人見喜云「頼蘇息」報言「汝当日日於此相看。我等人各，剰持一樵，以酬労直」童子縁此，遂多獲利。是時童子，報諸人曰「兄等，持柴勿向市売。総積我舎。我為売之，計束酬価」

諸人許可，与柴取直。後於異時，遇天陰雨。霖過七日，柴価増高。

所得が入った。かれは考えた。『商売のなかで，柴の商いというのは低級なものだ』かれは考えた。『柴の商いに，上等な木を加えようか。ぼくは，雑貨屋を開いてみよう』かれは雑貨屋を開いた。かれは正直に振舞った。かれに，より多くの所得が入った。

更多得利。童子自念『我雖獲利，終非久長。売柴為活，人所軽賤』即買諸雑物，自為小鋪。獲利転多。

かれは考えた。『商売のなかで雑貨屋というのは低級なものだ。ぼくは，香料屋を開いてみよう』かれは，香料屋を開いた。かれに，たくさんの所得が入った。

復作是念『此之雑物，商人所恥』便置香鋪，依価而売，倍獲多銭。

かれは考えた。『商売のなかで先のようなやつは低級なものだ』〔かれは金細工屋を開いた。〕かれは，すべての金細工屋たちを打ち負かした。かれに〈鼠の金細工屋〉〈鼠の金細工屋〉という呼び名がつくようになった。

復更思惟『此無大用』便設金鋪，得利弥甚，映蔽諸鋪。商人嫉之。便与施号，名鼠金鋪主。

〔打ち負かされた〕その金細工屋たちは言った。

「みなさん，われわれ全部が，この〈鼠の金細工屋〉に負かされてしまった。われわれは，こいつに自尊心を抱かせ，大海に出るように仕向けよう。そこで不幸にして災難に遭うようになるかもしれない」

衆共議曰「諸君，当知。由此鼠金鋪主映奪，我等交易不成。我等宜応共至其所，激令入海多求宝物，致令因此死而不帰」

かれらは，かれの近くに立って，自分たちで話をしていた。

「みなさん，たとえば，人は，象の首に乗って行く〔身であっても，零落して〕馬の背に乗って行くようになるかもしれない。馬の

即俱近鋪辺聞語声処，共為議曰「君等知不，観諸世間，不紹継人所為日退。譬如有人，先時乗象，後便乗馬，棄

背に乗って行っても，駕籠で行くようになるかもしれない。駕籠で行っても，両足で行くようになるかもしれない。そのように，この〈鼠の金細工屋〉の父親と祖父たちは，海で船を使った交易をする者たちであったが，こ〔の〈鼠の金細工屋〉〕のほうは，いま苦労して生計をたて，〔ささやかに〕金細工屋を経営している」

〔それを〕聞いて，かれは言った。

「何を話しているのですか」

かれらは言った。

「お前のお父さんお祖父さんたちは，船を使った交易をする人たちだった。その〔子供である〕お前は，いま苦労して生計をたて，金細工屋を営んでいる」

かれは家へ行って，母親に尋ねた。

「お母さん，ぼくたちのお父さんとお祖父さんたちは，大海で船を使った交易をする人たちだった，というのは本当ですか」

かの女は考えた。『きっと，こ〔の子〕は，何かを，どこかから聞いたのだろう。わたしが嘘をついて騙すのは，適当なことではないだろう』

「息子や，本当ですよ」

かれは言った。

「許可してください，ぼくも大海に出たいのです」

馬乗輿，復更棄輿，歩渉而行。此鼠金鋪主，亦復如是。自祖父已来，皆入大海，求好珍宝，自済済人，遠近称歎。此兒今日，不自存立，開小金鋪，貝歯交関，辛苦求生。誠哉可念」

彼聞此語，便問諸人「君等，向来談論何事」諸人具以事答。聞是語已，黙然帰家，問其母曰「我之祖父，曽入大海，求覓珍宝，為富商主耶」

母作是念『豈非此子他処聞知。今我不応自作欺誑。宜当依実以事告之』「汝乃祖乃父，皆入海中，為大商主，人共称歎」白母言「我今亦欲往海洲求覓珍宝」母曰「汝不須去」不久

かの女は言った。

「息子や，ここに滞まりなさい」

かれは，さらに重ねて言った。

「ぼくは行きます」

かれの執拗さを知って，許可した。

かれは，触れを出した。『あなたがたのなかで，〈鼠の金細工屋〉とともに，関税・通行税・渡船料を要さずに，大海に出たいと思う者は，大海に持って行く商品を集めよ』五百人の商人が大海に持って行く商品を集めた。

そこで，〈鼠の金細工屋〉は，めでたい祭日に祝祷を行なって，荷車，竿，袋，篭，駱駝，牛，驢馬で商品を担って，大海へと向かった。かれは，次第に〔進み，〕大海に出るべく〔船着き場に〕到着した。

その商人たちは，大海を見て怖じけ，船に乗ろうとしなかった。隊商主〔である〈鼠の金細工屋〉〕は，船頭に言った。

「さあ，男子よ，話しなさい。大海の特徴をありのままに話しなさい」

そこで，船頭が声高に告げ始めた。

「この大海には，〔438〕このような宝玉がある。すなわち，宝珠，真珠，瑠璃・貝殻石・珊瑚，銀・金・瑪瑙，車渠，紅玉，右旋貝である。あなたがたのなかで，このような宝玉によって，自らを本物の悦楽で満足させ，両親，妻子，下女・下男・下働きの者，友人同

更白。母知意正，遂不遮止。見母許已，即令遍告域邑『諸君，若有欲入大海求珍宝者，応随鼠金商主。不輸税物，安穏去還。入海之貨，当可預弁』時有五百商人，聞告令已，各弁海物，佇望行期。

時鼠金商主，卜問良辰，為吉祥事。遂共諸人，将諸貨物，車馬担運，往適海浜。既至海已，諸興易人，望海生怖，咸有退意，不欲昇舶。爾時商主，恐人尽帰，告拖師曰「仁可以実報知海中珍貨之物」拖師即便告諸人曰「汝贍部洲人，各応善聴。此大海中，多有奇貨珍玩之物，所謂末尼真珠吠琉璃宝珊瑚貝玉金銀赤珠右旋妙螺，衆宝非一。汝等若能入大海中得此宝者，自於一形，歓楽

僚・親類縁者を〔満足させ,〕時に応じて,沙門やバラモンにたいし,〔こころを高まりの〕頂点に導き,輝かしく,安らぎの結果をうみ,来世に天界をもたらす〔そのような〕施しをしようとする者は,大海に出るべきである」

世間は繁栄を欲するものである。大勢の人々が乗り込んだために,その船は〔重量に〕堪えられなくなった。隊商主は考えた。『どうして,いま〈下りよ〉と言えるだろうか』かれは,船頭に言った。

「さあ,男子よ,大海の特徴を,ありのままに告げなさい」

そこで,船頭は声高に告げ始めた。

「〔この大陸〕〈ジャンブ樹の島〉の商人である,みなさんは,聞くがよい。この大海には,このような大いなる恐怖がある。すなわち,大魚の恐怖,怪物の恐怖,怪魚の恐怖,渦巻の恐怖,海獣の恐怖,鰐の恐怖,水中を動く山塊に衝突する恐怖である。また,かしこには,森に徘徊する盗賊どもが,青や白〔の旗〕を押し立ててやって来て,われわれの生命を残りなく奪うことになるかもしれない。あなたがたのなかに,愛すべき自己,両親,妻子,下女・下男・下働きの者,友人同僚・親類縁者を捨てて〔行ける人がいる〕ならば,大海に出るべきである」

勇気ある者は少なく,小心な者は多い。大

受用。父母妻子親族知識,及諸童僕,無辛苦者。於時時間,悉能給施沙門婆羅門等,当生善趣果報自随,得往天宮,受諸快楽,漸修勝福,登涅槃路。若楽此者,宜共昇舶入大海中」然世間人,聞得富盛,悉皆心喜。即俱昇舶。人多舶重。商主便念『既親勧上。今者如何更令下舶』即告拖師曰「汝今宜可説大海中過患之事」是時施師,聞商主語,即便以実,告諸人曰「贍部洲人汝等当聴。此大海中,有大怖畏,所謂摩竭大魚呑舟吐浪,洪波廻洑淼漫無辺,江豨海豨在処為難,黒風卒起漂泊山隅,裂帆摧幢控告無処。復有青旗海賊,非意忽来,打破大舶,俱断汝命。遂令汝等棄所愛身,父母宗親不復相見。汝等当自思察,

勢の人々が下りたので，その船は〔重量に〕堪えられるようになった。そこで，船頭は，三たび〔出発の〕宣言・布告をなし，それから一本目の〔繋留〕索を解いた。二本目・三本目の索を解いた。かくして，その船は，偉大な船頭の助力と力強い風に動かされて，流れる雲のごとくに，順風をうけて，ついに〈宝の島〉に到着した。

さて，船頭は大声で告げ始めた。

「〈ジャンブ樹の島〉の商人である，みなさんは，聞くがよい。この〈宝の島〉には，宝玉に以たカーチャマニというものがある。それらを，あなたがたは，繰り返し調べたうえで，採取しなければならない。あなたがたが，後日〈ジャンブ樹の島〉に帰還したときに，後悔するようなことになってはならない。また，この〈宝の島〉には，クローンチャクマーリカーという〈魔女〉が棲んでいる。かの女たちは，男をあれこれと愛撫して，そのままそこで，無残にも破滅に陥れてしまう。この島には，〈酔果〉というものがある。それを，あなたがたは，食べてはならない。それを食べた人は，七夜にわたって悶絶する。また，この〈宝の島〉には〈鬼人〉が棲んでいる。かれらは，七日の間は，人間を見過ごしているが，七日が過ぎると，風を吹き出し〔て起こし，〕仕事が終わらないうちに，船が

不去為善」時諸人衆，多怯少勇。聞斯告已，下舶者多。其舶遂便軽重合度。三告令已，便抜沈石。長風鼓扇，大舶㪷波，猶如駃雲一翥而去。悉皆安穏得至宝洲。

拖師告曰「贍部洲中所有商客，皆悉須知。此之宝洲，多仮琉璃，与真宝相似。仁等応可善為試験，方可持之。勿至本郷方生悔恨。又此宝洲，有鳴鶴羅刹，依止而住。若見人時，作諸方便，出柔軟語，諂誑於人。遂令君等喪失身命。又此洲中，多是酔果。人若食者，於七日中，不能醒覚。仁等須知可為警慎。又此洲処，多有非人，依止而住。於七日中，共相容忍。過七日已，便放大風，吹破商船」

運び去られてしまう」

それを聞いて，その商人たちは，油断なく注意を払った。かれらは，ちょうど胡麻・米・麦・豆を〔満載する〕ように，繰り返し調べたうえで，その船に，もろもろの宝玉を満載した。

時諸商人，聞是語已，各自防固。多収珍宝，如稲麻穀豆，傾置船中。

かれらは順風にのって〈ジャンブ樹の島〉に戻った。このようにして，七たびにわたって，目的を果たした船が帰還した。

是時拖師，候風便還贍部。如是七度安穏而帰。

かれは母親に呼ばれた。

「息子よ，ここで，身をかためなさい」

かれは言った。

「まず，主だった債権者に弁済し，その後で身をかためることにします」

かれは，かの女に言われた。

「息子よ，お前のお父さんやお祖父さんは，債権者をこしらえなかった。どこに，お前の債権者ができたのです」

かれは言った。

「お母さん，ぼくだけが承知していることです」

其母告曰「汝可娶妻安置家業」兒白母曰「我還債後，方随母教」母告子曰「非汝祖父先有債息，因何今日云還債耶」答曰「我自知有」

かれは，四種の宝玉からなる四匹の鼠を作った。かれは，黄金を櫃に満たし，四匹の鼠を四隅に置いて，〔それを持って，父親の友人だった〕資産家の家に行った。

資産家は，そのとき，かれの功徳を称えていた。

即以四宝，造鼠四枚。復以銀槃，盛満金粟，上置四鼠，詣父知識商主之家。時彼商主，共諸人衆，論及鼠金「諸君知不。鼠金商主，有大

「ご覧なさい，みなさん，〈鼠の金細工屋〉は，どうして，こんな立派な福徳を持っているのだろうか。草でも土くれでも，摑むものは何でもすべて，黄金になってしまう」

福徳。若執瓦石，尽成金宝」作是語時，守門之人，告商主曰「鼠金商主，来在門外」報言「喚入，無宜見遮」門人引入。

かれが，〔439〕そのように話をしていたとき，かれの門番が告げた。

「〈鼠の金細工屋〉が門口にいます」

そ〔の資産家〕は言った。

「入って貰え。〈鼠の金細工屋〉を案内せよ」

そ〔の金細工屋〕は，入って，言った。

「これが，あなたに〔戻す〕元金です。これが利息です。受け取ってください」

そ〔の資産家〕は言った。

「わたしは覚えていない。本当に，君に何か〔貸し〕与えたことがあるのだろうか」

「ぼくは，あなたに，思い出していただきます」

かれは〔死んだ鼠のことを〕思い出させた。かれは尋ねた。

「君は誰の息子か」

「しかじかという長者の〔息子〕です」

資産家は言った。

「君は，わたしの友人の息子だ。わたしの方こそ，君に渡さなければならないものがある。君の父親が〔海へ出て〕行くとき，わたしの手に，お金を預けていった」

即以宝鼠金槃，前奉商主，白言「此是本鼠，此是利直」商主告曰「我不曽憶与汝銭財。何故今時云酬本利」答曰「我為憶之」便以往日棄鼠因縁，具報商主。商主問言「汝是誰子」答云「是某長者之子」商主曰「汝即是我知識之子。我宜与汝，豈汝酬還。汝父去日，以多少物，置在我処，尚未相還」即以長女，許彼為妻，瓔珞厳身，送至其宅。

その資産家は，娘を，あらゆる装身具で飾りつけて，妻にするべく，かれに授けた。

「修行僧たちよ，どのように思うか。この資産家こそ，実に，そのときその折のわたくしであり，この〈鼠の金細工屋〉こそ，実に，そのときその折のパンタカなのである。そのときも，わたくしは，わずかな忠告で励まして，大いなる富貴のなかに安住させたのだが，いまもまた，わたくしは，わずかな忠告で諭して，輪廻の荒野を越え〔させ〕，究極の完成である無上の安らぎ・涅槃に安住させたのである」

世尊告曰「汝等苾芻，勿生異念。往時商主，即我身是。鼠金商主，即愚路是。我於往日，説少因縁，言及死鼠，遂令因此得大富盛。今時，因我説少教授，便自策励，断諸煩悩，出生死岸，成勝妙果，永證涅槃」

（過去世物語，その三）

〔439[11]—440[6]〕修行僧たちはブッダ・世尊に尋ねた。

「尊師よ，パンタカは，いかなる業をつくって，その結果として，鈍く，この上なく鈍く，愚かで，この上なく愚かな者として生まれたのですか」

「修行僧たちよ，パンタカは〔いろいろな〕業をつくった。修行僧たちよ，つくられ積み上げられた業が〔結果として〕熟するのは，外なる〔要素である〕地界・水界・火界・風界においてではない。そうではなくて，〔その行為者自身に〕執持された〔内なる，心身の要

巻31〔799中[2]—下[10]〕

時諸苾芻，更復有疑，問世尊曰「具寿愚路，先作何業，得受人身，至愚至鈍」

世尊告曰「此愚路苾芻曽所作業，増長時熟果報現前。汝等苾芻，凡諸有情自所作業善悪果報，非於外界地水火風令其成熟，但於己身

素である〕蘊・処・界のなかで，善と悪〔の業〕が熟するのである。

蘊界処中，而自成熟」

説伽他曰，

幾百千万劫を経過しても，業が消滅することはない。
〔条件が〕集まった，そのとき，実に人々の〔業〕は結果を生む」

「仮令経百劫
所作業不亡
因縁会遇時
果報還自受」

修行僧たちよ，人間の年齢の〔数えかたで〕二万歳のむかしに，カーシャパという名前の師が，〈真如から来た者（如来）〉〈供養に値する者（応供）〉〈遍く正しいさとりを得た者（正遍知）〉〈智慧と行ないが完全な者（明行足）〉〈善くさとりに逝ける者（善逝）〉〈世間をよく知る者（世間解）〉〈無上の人（無上士）〉〈人間を制御する者（調御丈夫）〉〈神々と人びとの師（天人師）〉〈さとった者（仏）・世に尊敬される者（世尊）〉として，世に出られた。

汝等苾芻，乃往過去人寿二万歳時，有迦葉波仏，出現世間，如来応正等覚明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏薄伽梵。

そ〔のブッダ〕が，二万人の修行僧を随えて，ヴァーラーナシーの近郊に滞在しておられた。そ〔のブッダ〕の教えのもとで，〔パンタカは〕三蔵に精通する者となっていた。そこで，かれは，ものおしみから，〔教説の〕四句からなる詩一つさえ，だれにも教えなかった。

時声聞衆，有二万人，俱於婆羅痆斯国住。愚路是彼衆数，明閑三蔵，為大法師。稟性慳法，曽不教人。乃至四句伽他，亦不為説。命終之後，生在天宮。従彼死已，堕在人趣，生販猪

〔その後，生まれかわって〕さらに，とあ

る村落で豚飼となっていた。その村から〔川をはさんだ〕川岸に，もう一つの村落があり，そこでは，〔月の変わりめの〕祝日が近づいていた。かれは考えた。『豚どもを屠殺して運んでいっても，肉の買い手がいなければ，腐ってしまう。生きたままのやつを持って行こう。買い手がついたその場その場で屠殺し，〔買い手のところへ〕持参すればよい』

かれは，たくさんの豚どもの膝を縛って，船に乗って出発した。その船は，そ〔の豚ども〕が揺れ動いたために，冠水した。そこで，〔かれは〕不運にも災難に遭ってしまった。その豚飼も，そこで，流れに運ばれていった。

その川岸に，五百人の〈師なくしてさとる者（独覚）〉たちが住んでいた。かれらのうちの一人の〈師なくしてさとる者〉が，水を〔汲む〕ために川へ行った。かれは，そ〔の豚飼〕を見つけた。かれは考えた。『さて，こいつは死んでいるのか，生きているのか』見ると，生きていた。かれは，そ〔の豚飼〕を，象の鼻のような腕を伸ばして引き上げ，砂の小山をこしらえ，そこに，頭を低くして置いた。

そ〔の豚飼〕の身体から水分が流れ出た。かれは起き上がった。人間の足跡を見つけた。かれは，その足〔跡〕をたどって行って，五

家，年漸長大，屠猪為業。於其村側，有一大河。渡河不遠，有一聚落，節会日至。屠者念言『我今若多殺猪持肉売者，儻無交易，肉皆爛壊，銭有損失。宜并猪命将至彼村。至日方屠以売其肉，此無損失，得利尤多』遂以縄縛猪，安在船上。猪相蛎触，揺動船艚。其猪及船，一時傾没，救済無処，猪並命終。時彼屠人，亦随流而去。於河岸辺，有五百独覚，依林而住。是時有一独覚取水河浜，遥見一人随流而下，乃作是念『此沿流者，為死為活』審細観察，知是活人。即現神通，長舒右手如象王鼻，牽取其人，於乾砂潭，合面而去。時彼溺人，吐水既尽，即便起立，四観方城，見有人蹤。尋跡而行，至独覚処，致礼敬

百人の〈師なくしてさとる者〉たちを見つけた。かれは，かれらに，葉，花，果実，歯みがき用の小枝をもって，かしずきだした。かれらは，かれに，食べものの残りを差し出した。かれは食べた。

已，求依止住。於日日中，為諸独覚，採花摘果取諸根葉，以相給侍。時彼独覚，各以残食，共相供済。

それから，〔440〕その〈師なくしてさとる者〉たちは，結跏して禅定に入った。そのとき，かれも一隅にあって，結跏して禅定に入った。かれは，そこで〈想いのない境地（無想定）〉を獲得して，〈想いなき者たちの天界（無想有情天）〉に生まれていった。

時諸独覚，咸加趺坐，静慮而住。屠人見已，亦学加趺。頻修不已，得無想定。於後命終，生無想天処。従彼終已，生此人中。

「修行僧たちよ，どのように思うか。〈遍く正しいさとりを得た者〉であるカーシャパの教えのもとで三蔵に精通する修行僧となり，のちには〔生まれかわって〕豚飼となったこの者こそ，〔いまの〕修行僧パンタカなのである。

「汝諸苾芻，勿生異念。往時屠猪人者，即此愚路苾芻是。

こうした〔上述の〕ものおしみから，四句からなる詩一つさえ，誰にも教えなかったこと，豚どもを屠殺して，〈想いなき者たち〔の天界〕〉から，この世に〔さらに〕生まれたこと，そうした業が熟することによって，〔パンタカは〕愚かで，この上なく愚かで，鈍く，この上なく鈍い者となったのである」

由彼昔時慳悋於法，乃至四句伽他不為人説，又多屠殺諸畜生故，復由生在無想天中，由彼業縁，至愚至鈍」